
信号機と人殺し

うろち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

信号機と人殺し

【Nコード】

N1191L

【作者名】

ころち

【あらすじ】

このサイトには初めて投稿します。まだまだ未熟な者ありますが、最後まで読んでいただけたら幸いです。

通学路の待ち時間が異様に長い信号機。交通量が多い訳でもないのに。まあ、いつも無視しているから実質の待ち時間はゼロなのだが。

俺は学校へ向けて自転車のペダルを漕いでいる。もう、すぐそこにその信号機が迫っている。青の歩行者信号が点滅中。あつ、今赤に変わった。俺は舌打ちする。

信号機に差し掛かり一応減速。左右を見るが、車は来ない。まったく、どうしてこんなところに信号なんか作ったんだか。

俺はペダルに乗せた足に力を込め、再び加速する。横断歩道を渡り、もうじき横断完了。そんなところでいきなり前方に人影、俺は慌ててブレーキをかけ、目を瞑った。ぶつかった感触は無い。俺は恐る恐る目を開く。

そこには、真つ赤なランドセルを背負った小さな女の子がこっちを向いて立っていた。自転車に接触しないギリギリの場所である。大きな瞳がこちらをじつと見つめている。

「ごめんね、大丈夫だった？」

俺は女の子に声を掛ける。

「大丈夫。でも……」

「何？」

「お兄ちゃんはどうして今信号無視したの？」

「え……」

なんと答えるべきだろう？ 俺は考える。大人な対応をするべきだろうか。

「急いでいたの？」

女の子がさらに質問する。まあ、いいや、そういうことで。

「そうなんだよ、ちょっと用事があってね」

「用事があつたら信号無視していいの？」

さらに答えに窮する質問だ。やっかいなことになったな。

「いや、だめだよな。ごめん、お兄ちゃんが悪かった。この通り。もうしないから許して」

俺は顔を前で手を合わせる。付き合いきれん。もうこれで終わらせよう。

女の子は無言で俺を立ち尽くしている。それを見て、俺はハンドルへと手を戻し、女の子を避けて行こうとする。

「でも、お兄ちゃんいつも信号無視してるよね。悪いなんて、本当は思っていないんでしょ？」

女の子の真横に来たあたりで、女の子が、さっきまで俺がいた空間をぼんやり眺めながら再び口を開いた。いつもってなんなんだよ。常に俺のこと見てるとでも言うのかよ。めんどくせえな。

「だからごめん。もういいでしょ？」

「お兄ちゃんは人を殺すの？」

は？ もう何、マジで。

「いや、意味分かんないんだけど」

「信号無視も人殺しも、法律に違反してるという意味では同じだよ。だから、信号を無視するお兄ちゃんは人も殺すのかなって」

ちよつと待て。こいつ頭おかしんじゃないか。見た目はただの可愛い小学生なのに、言っていることがメチャクチャだ。人殺しと信号無視が同じな訳ないだろう。

「ごめん、急いでるからもう行くよ」

俺はペダルを漕ぎ始める。

「この人殺し！ 人殺し！ 人殺し！」

いきなりの耳を劈く大声。声の主は女の子。鬼のような形相だ。俺は驚いたのと同時に、底知れない不気味さを感じた。

俺はどんどん加速した。女の子は人殺しと連呼していたが、次第にその声は小さくなり、ついには全く聞こえなくなった。

その日の帰り道。もうすぐあの信号機だ。あの時は、恐ろしかったが、後から考えるとそうでも無かった。学校では友達に笑い話として話せたくらいだ。

何が信号無視と人殺しは同じだ。信号無視くらい誰だってやっているだろう。あいつの言ったことが正しいとすれば世の中は人殺しだらけになってしまふ。甚だばかばかしい。

あんなところ車なんて通るわけない！

俺はそう心で叫ぶと、自転車を目一杯加速させた。目前に信号機今は赤。だけどそんなこと関係ない。左右確認さえもいらぬ。

俺は横断歩道へ飛び出す。その瞬間、甲高い音。そして俺の視界は回転しだした。空、地面、空、地面、空。最後は地面に俺の体は落ち着いた。何かが潰れるような気持の悪い音を立てて。

意識が途切れそうだ。全身が燃えているみたいに熱い。息をしているのか、していないのか判然としない。

撥ねられた。そう理解した。俺は何とか顔を横に向ける。あれが俺を撥ねた車か。小型のトラックだ。

人が降りてくると思った。助けしてくれると思った。しかし、トラックは何事も無かったかの様に走り去った。

トラックがいた向こう側に誰かが立っている。その人物はゆっくりと近づいてきた。その人物が近づくほどに俺の意識が薄れてゆくのを感した。

すぐそこまで、その人物は近づく。ようやく俺は気づいた。あいつだ。今朝のあの小学生の女の子だ。

女の子は微笑んでいる。まるで天使みたいだと、俺は思った。

俺は意識を繋ぎとめておくことが限界に近づき、目を閉じた。その俺の頭に綺麗な澄んだ声が響いた。

「人殺しには死の罰を」

轢き逃げされた斉藤和也の葬儀にはたくさんの弔問客が訪れてい

た。

そんなたくさんの人々の中からこんな会話が洩れ聞こえた。

「轢き逃げなんてひどいことするなあ、お母さんが可哀相だ」

「そうだな……、あのさ、ここだけの話なんだけど」

「ん、何？」

「あの、信号のあるところでさ、昔轢き逃げがあったらしいんだよ」

「本当かよ？」

「ああ、もうかなり前らしいけど、小学生の女の子が轢かれて亡くなったんだそう。当時は信号機はまだ無くて、その事件がきっかけで設置されたんだと」

「へえ、おんなじ場所で轢き逃げなんて、変わった偶然もあるもんだな」

「偶然かなあ、その女の子の呪縛霊があそこにいるんだったりして」

「馬鹿、声がでかい。場所考える」

「悪い悪い」

正解だよ、おじさん達。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1191/>

信号機と人殺し

2010年10月8日15時12分発行